

2008年4月7日

ニュースリリース

株式会社五藤光学研究所

独立行政法人科学技術振興機構より日本科学未来館の立体視シアターを受注

株式会社五藤光学研究所（取締役社長：五藤 信隆、東京都府中市）は、この程、独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館が導入する「3次元投影システム&装置」を受注した。同システムは「立体視システム」であり、同館ドームシアターガイアに設置されている既存システムに変わるものである。選定は総合評価方式により行われ、技術面、価格面の審査を経て当社提案システムが採用された。納入は平成20年末（予定）である。

株式会社五藤光学研究所（取締役社長：五藤 信隆、東京都府中市）は、プラネタリウム施設を中心に、23件のデジタルドーム映像システムを設置納入した実績を有している。また、国立天文台が実施した4次元デジタル宇宙プロジェクト（略称4D2U）には、共同研究者として参加し、立体視用全天ビデオプロジェクタ群の開発を担当した。

独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館（未来館）では、同館ドームシアターガイアにおいて、任意の2次元及び3次元のフルカラー画像（動画もしくは静止画）を投影できるシステムを導入することとし、平成20年1月、総合評価落札方式により同システムの入札が公示され、3月に入札書並びに提案書の提出が行われた。提案は、当社システムの実績に基づき、安定性と発展性を踏まえて、「VIRTUARIUM®II」システムとSONY製SXRDプロジェクタを用いて、分光立体方式によりドームシアター全体に「高解像度による立体視の宇宙」を実現するものである。

提案書の評価は、独立行政法人科学技術振興機構（JST）技術委員会により行われた。評価過程においては、技術提案が先ず審査され、提案点が確定した後に入札（価格点）が開示されており、決定に審査員の主観が入る余地が無く、他事例と比較しても、非常に公平かつ客観的な評価が行われたものと考えられる。

参加5社の中から当社に決定したことは勿論、日本を代表する科学館のドームシアターを当社が構築する栄誉は何事にも代えがたい喜びである。

取締役社長の五藤信隆は以下のように述べています。

「日本科学未来館は、「新しい知」としての先端の科学技術に触れることが出来る場所であり、ここに我々が新たに設置する立体視システムは、「新しい視点」を提供するものです。我々は、このシステムを日本科学未来館の皆様と共に継続的に発展させてゆき、常に新しくあり続けるであろうことを確信します。そして、そこを訪れる多くの利用者が様々な知見や探究心を得ることを願っています。」

この立体視システムは平成 20 年末に納入する予定です（開館時期は未定）。

< 解説 >

株式会社五藤光学研究所（GOTO INC）

プラネタリウム、大型映像、天体望遠鏡製造のトップメーカー。特に、プラネタリウムでは国内シェアの約 7 割を占めている。全天周フィルム映像（アストロビジョン）や、3D デジタル映像装置（バーチャリウム）を他社に先駆けて開発、発表する他、機器設備の能力を活かした映像コンテンツ製作も行う「ドーム空間のトータルクリエイター」である。
〒183-8530 東京都府中市矢崎町四丁目 16 番地

バーチャリウム（VIRTUARIUM）

1996 年 1 月に五藤光学が発表した、世界で初めてフルカラー CG をリアルタイムにドームスクリーン全天に投映するシステム。VIRTUARIUM とは、仮想の世界をあらわす Virtual と、空間を表す Arium を組み合わせた造語。2003 年には構成機器を更新した「バーチャリウム®II（VIRTUARIUMII）」を発表。愛・地球博や多くの科学館・博物館にて採用、設置されている。

日本科学未来館

2001 年 7 月に東京お台場にオープンした科学館。館長は宇宙飛行士の毛利衛氏。

「科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場」を設立の理念に掲げ、先端科学技術と人をつなぐための拠点として、主に、「科学を伝えること」、「人材を育てること」、「つながりをつくること」の三つのことに取り組んでいる。

〒135-0064 東京都江東区青海 2-41

- 1 バーチャリウム / VIRTUARIUM は五藤光学研究所の登録商標です。
- 2 SXR D はソニー株式会社の登録商標です。

以上